

# 人と馬が寄り添って 暮らせる町に――。

「僕、一人で馬から降りられるよ」。2歳の時から馬にまたがる菊池政光さん(28)の長男・興洋君(5つ)にとって、乗馬はお手のものだ。奥さんの優子さん(30)と背中を貸す馬がやさしい目で見守る。

取材を通じて、馬は本来持つ力強さだけでなく、わたしたちに喜びや感動、夢まで与えてくれていることを感じた。「競り市」や「東北馬力大会」に代表されるように、市内の馬行事には、全国各地から多くの人が集う。かつて遠野の人々の暮らしを支えてきた馬たちは今、遠野の新たなまちづくりも支えている。

『遠野物語』発行100周年の節目を来年に控え、文化によるまちづくりが進む本市。民話や伝統芸能などど並び、馬も大切な遠野の文化だ。馬がいて、人がいて、それを包み込む広大な自然があつて、人と馬との良好な関係が築られてきた。どんなに魅力あるものも、磨かれなければ光輝かず、どんなに価値あるもの

も、それに気が付かなければ活かされることはない。あらためて地域の魅力や価値といったふるさとの財産を見つめなおす必要がある。

耳を澄ませてほしい。これほど文明が進んだ現代に、馬の蹄や馬車が走り去る音が、遠野のまちなかにいつも響いていたらどんなに素晴らしいことだろう。遠野らしい、馬を活かしたまちづくりが求められている。そこには、遠野を「馬の聖地」へと変える、みんなの「夢」が必要だ。1頭の馬だけでは「1馬力」の力も、「夢」が加われれば「馬チカラ」として無限の可能性が広がる。

これからの100年、新しい遠野物語を作るのは、わたしたち自身です。もちろん、馬とともに…。

◎馬特集 「産地」から「聖地」へ 完

【参考文献】バハヤチニ力第9号(同編集委員会)、乗用馬生産30年の歩み(同記念事業実行委員会)、馬とくらし(市立博物館)

◎取材を終えて

## 馬チカラ

自宅で飼育している馬と触れ合う、菊池政光さん、優子さん、興洋君親子。